

寄稿文Ⅱ

「しずくいし少年少女歴史教室」の意義と可能性

— 雫石町の将来に向かって希望の灯を掲げるもの —

会 員 高 橋 繁

1. はじめに

「しずくいし少年少女歴史教室」の支援員として参加したのは、平成23年(2011)



中央公民館での 2015 教室の開講式時の写真(6月27日)。筆者は後列左から二人目。写真撮影は支援員の高橋司さん。受講生はこの直後に3名が申込み8名に。支援員は9名が登録してくれた。

からである。年間8回の教室は雫石町の歴史と風土の発見の連続であった。少年少女より自分自身が目の覚める思いで感動した。何しろ、この歴史教室は町内の歴史遺産にとどまらず、県立博物館・県立図書館・秋田県田沢湖の関所跡など、小型バスで移動するものだから、大人も学べる本格的な実地、実践教室である。

支援員として参加すること五年になり、この歴史教室は実に重要な意義と可能性を持っていると確信するようになった。その意義とは町作りの根本となる人づくり、教育の原点を参加した子供達に、支援員に気付かせていることである。以下、その要点を記したい。

2. 歴史を学ぶということは自分に気付くことである。

「この神社は、何時、誰が、どんな願いで作ったのか」と考えたとき、自分の体験と結びつけて考える。そして、他の人々の考えと比べ、自分の考えや見方を修正するものだ。そのこと自体が自分の気付き、自分を知ることである。しかも、何百年の昔から、いや算え切れぬ昔から続いている命に気付いていく。これは教育の根幹である。「命」の不思議に気付かない人の、知識や学問は空虚である。

3. 歴史を学ぶということは、生まれ育った郷土の良さを発見することである。

雫石の山も川も、森も田畑も広々と美しい。生きるだけの食べ物も、寒さを防ぐ材料もここには昔からあったのだ。だから人々は生き続け、今がある。町の歴史遺産を尋ねていると、そのことが心からわき上がってくる。親もそのまた親も育ち、生活したこの町は、かけがえのない町なのだ。そう感ずることが、歴史を学ぶことである。

宮沢賢治が、もし東京や九州、沖縄に生まれ育っていたら、「雨ニモ負ケズ」のような詩はできなかつたらろうと言った人がいた。その理由は、山や川の風景も星の光も、風の音も、田畑の匂いも、みな土地によって違うからだ。これを原風景というそうである。そのような風景は歴史教室のような活動しなければ、身につかないものである。この原風景は、いざと言う時、その人の考え方、生き方を突き動かす大きな力となるものなのだ。

4. 歴史を学ぶということは、多様な考えをすることである。

「戸沢の殿様は、なぜ雫石から去ったのか」という問題には、決まった答えがない。「志和の殿様と闘ったからだ」「なぜ闘ったのか」次々と問題は出てくる。歴史の問題の多くは、決まった答えのない問題が多い。多様な考え方をした上での多数が認めたものが答えである。多様な考え方は、これからの教育、子供の力として欠かせないものである。初めて会った人にも対等に付き合える力が多様な考え方である。世界の人々と付き合うのがこれからの人間である。「胸は祖国に、眼は世界に注ぐ」生き方、生きる力が自然に身につくのが歴史教室である。

教室に参加した子供達は、人の心を感じる想像力、自分の心を表現する力、臨機応変に対応判断する力が、一年間の活動で確実に育つことを知った。

5. 歴史を学ぶということは、主体的に生きる力がつくことである。

歴史教室で史跡をみると、いくつも問題や疑問が出てくる。「一里塚」の目的は距離や旅程をわかりやすくするためだけだったのか。いや、幕府に地理を報告しなければならなかったからだ。幕府の国境検分の報告に必要なからだ。なぜ幕府はそんなことをしなければならなかったのか。等等の問題が出てくる。主体的に生きるというのは、答えのない問題を見出す力である。いざという時に自信を持って判断する力である。自分の「目標」を自分で発見し、その達成に向けて実践することである。教室に参加した子供達は、年相応に、何気ないことから、身につけていっている。



6. 歴史を学ぶということは、協力・感謝・誇りを感じることである。

「越前堰」や「開田」、「極楽野開拓」を見たり、聞いたりしながら、子供達は協力の実際を感じ取り、やがて当時の人々の並々ならぬ苦勞と智慧に、共感し感謝の心を表した。さらに、こうした先人の精神が今も人々の心に息づいていることに気付き、誇りに思うようになる。雫石町無形文化財芸能祭では、その発生と伝承の歴史を知り、苦しさや悩みを乗り越えた人々の優しさと逞しさを感じ取るのである。

7. 歴史を学ぶということは、学力を高めることである。

元慶応義塾長で独立行政法人日本学術振興会理事長の安西祐一郎氏によれば、英語には「学力」という単語はないそうである。また、学力とは「生きる力」であり、その三要素は①豊かな人間性②健康・体力③確かな学力であるという。

「確かな学力」とは①基礎的な知識および技能を身につけていること②これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力があること③主体的に学習に取り組む態度である。さらに主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度であるという。



この学力は、大人にとっても大事なものである。「しずくいし少年少女歴史教室」に参加することは、実に学力向上の実践をしていることである。

8. 歴史を学ぶということは、雫石町の未来に展望をひらくことである。

雫石町の30年後、50年後はどのようになっているか考えた人は大変少ないと思う。なにしろ「来年の事を思うと鬼が笑う」ということわざもあるくらいであるから、30年後も50年後も考えるだけ馬鹿らしいと思うのが普通であると思われる。

しかし、時代は予想もつかない速さで変化し続けている。人口は減り続けるが、高校生や大学生は横ばいであると予想されるという。生活の基盤であるどんな地域も、どんな産業も世界と直結している社会と時代になるという。情報機器の発達、交通機関の整備がどんどん進み、情報の処理、発信が最重要な時代は、すぐ近くまで来ている。

自分の存在する地域社会、産業の現実を間違いなく把握しないと根無し草のようになってしまうことは明らかである。町も同じである。

町作りは、都会や盛岡、仙台などの他市町村の真似では、どこにも通用しない時代にもうなっている。雫石町の独自の良さに気づき、発信することをいつも意識した町民によってしかできないのだ。今ある現実、過去から続いているのである。歴史を学ぶことが今こそ重大なのだと痛感する。「しずくいし少年少女歴史教室」を企画し、運営に当たって居られる方々と援助を惜しまない町教育委員会の先見に敬意と感謝を申し上げるものである。



上和野馬頭観世音堂の旧殿で
貴重な絵馬に見入る筆者

寄稿文Ⅲ

“春木場”での『春木』引き揚げ現場の写真みつかる

(附録) 田中喜多美氏らが語る「雫石川の筏師たち」のこと

会 員 関 敬 一



前ページの写真は、雫石町御明神中村（中島行政区）在住の中村一民（かずたみ）氏（67歳）のご提供による白黒2枚組の写真の内の一枚である。もう一枚が、下の写真だ。

雫石町御明神にある「春木場（はるきば）」の地名の由来を示す貴重な写真である。写っている「竜川」は駒ヶ岳方面を源とする川で一級河川「雫石川」の本流である。

撮影した年代・時期は裏面などに記載がなく不明である。帽子や服装などから明治後期から大正中期ごろのものと推測される。平成27年8月に、町立御明神小学校さんからの情報により、筆者が中村さんのお会いし、原版をお借りして複写させていただいたものだ。中村さんのご承諾を得て町教育委員会社会教育課さんにも提供した。

写真を貸してくださった中村一民氏は、春木場の対岸の中島集落に住む方で、自宅は川原から直線で300メートルほどの所にある古くからの農家である。写真は一民氏の祖父吉太郎氏（故人）が所有していたものらしいが、その入手先は分からないという。往時春木の引き揚げ作業が最盛期のころは川原周辺の住民たちも作業に就労していたものと思われることから、その縁で中村家に残っていたものであろう。中村家には木材を引き上げるときに使用した「鳶口（とびぐち）」が残されている。

上の写真の現物は、カバーはないが、硬い立派な台紙に張られている。作業関係者およそ30人が勢揃いしての<記念写真>であろうか。今の小学生ぐらいの学生帽をかぶった子供と一緒に並んでいる。素足なので作業員ではないようだ。

写真の中で前列の印半纏を着た二人のうち右側の作業員の半纏にははっきりと「吉谷材木部」の文字が読み取れる。左側の人の半纏の文字は「◎赤戸○山林」（最初の印は判別不能・「赤」は「志」かもしれない）。

引き揚げられた丸太は薪とするためか長さは三尺（90cm）弱ぐらいに見える。竜川（雫石川）の水量は、春の雪解け水で増量しているせいか多いように感じる。

対岸の集落の建物の様子から写真の場所を推定するのは困難に感じる。



そして、上が2枚目の写真である。

こちらの1枚は作業員たちが川に入り、流れてきた木材を岸に寄せている写真である。川原に立てられた三本の長木の上にいる白帽、白シャツの男性は流れてくる木材があることを川の中の作業員に知らせる“現場監督”的な立場の人のように見える。流れてくる木材は十分乾燥していないため、川面に出ているのはほんの一部で、特にブナなどの硬い木は、ほとんど沈んだままで流れてくるため川の中の作業員には見えにくい。このため高い所に立ち木材が流れてきていることを教える役目の人が必要だったと思われる。

それにしても、流してきた木がそのまま下流に流れてしまうことはなかっただろうか。この対策のために「さく（柵?）」と呼ばれる構造物を川の中に設置したという話が現地に伝わっている。「さく」は3、4本の丸太を十字に組み、これを何組も川を横断するように横に並べていたようだ。この十字の木の根元には、フジ蔓（つる）で編んだ網に玉石を入れて重しにしていたという。この「さく」に引っかかったところを作業員たちが鳶口で岸边に寄せたらしい。

この「さく」で思い浮かぶのは、春木場の上流にある「日陰堰という農業用水路の取水口近くに、水を引き入れるために設置した「三本框（かまち）」という構造物である。

また、年代は昭和15、16年ごろまで下がるが、雫石駅の南側、現在は鯉のぼりを掲揚している辺りの雫石川の中にはやはり流木をせき止めるための「さんき」という構造物があったと近くの横手良雄さん（85歳・駅前行政区）が語っている。横手さんは

「さんき」は「三基か三木」だったのではないかという。それも太い丸太を流されないように川の中に打ち込んで作っていたのではないか、その名残りらしい川の中に立っている木を見たことがある、と話してくださった。

参考までに、日影堰土地改良区の頭首工への取水のために設けられた三本框のイラストを載せてみた。



「春木場」以外にも、町内各地に「流木引き揚げ地」があった

この写真が写されたと思われる雫石町（大字）上野（字）新里地内の竜川沿いの地域は、かつて山から川流しされた「春木」の陸揚げ地であったことから、通称「春木場」と呼ばれている。「春木場」の地名は盛岡市内・中津川沿いにもある。

雫石町内には春木場ではないが「土場（どば）」や「留場（とめば）」と呼ばれる川流しされてきた木材の引き揚げ地が御所地区の町場や安庭周辺にもあったようだ。

また、町教育委員会刊行の「雫石の旧家」（昭和57年初版）の〈御所地区〉柵沢の金十郎家（米沢家）の項に「藩政中期頃、水田のあるところは金十郎家のみであった。と伝えている。奥から流した春木が金十郎家の水田に上げられ、そこで筏に組んで、盛岡に出したものと伝えられ、昭和初期まで筏流しの親分であったそうだ。金十郎家の正統は金吉氏の家である。」と記載されている。

在家千貫、山千貫、川千貫

中世における郷または村を構成する単位は「在家」であった。慶長元（1596）年、旧御明神村の有力者木村丹波が、新たな領主となる南部信直に県北二戸の福岡に呼び出され、雫石郷の説明をした中で述べたのが表題の言葉とされる。

丹波は、雫石（雫石）郷の生産力を聞かれて「その総額は三千貫文である」と答え、その内容は「在家たちの生産力千貫、桧、スギ、桂、栗その他山林樹木の生産高が千貫、これを材木または春木（薪）として筏（いかだ）を組み、雫石川を利用して下流の飯岡や栗谷川（厨川）、盛岡に売る収益が千貫である。」と説明したとされます。

※「在家」……中世の村は在家のわずかな集落とこれに付帯した耕地で構成され、集落間には無主の林野が横たわっていた。在家とは屋敷（宅地・建家）と耕地を所有し、田一町歩を基準として年貢を納める者を言う。在家の多くは半土半農の郷侍であった。

また、藩政時代末期、雫石代官所の御物書を勤めた上野広安は雫石の山林概況を「山林に富み、樹木の繁殖なる。加ふるに水路至便の地にして喬木巨材といえども、朝に伐採して、夕に有用の地に達す。（中略）…舟筏の通路至便なること、実に管内無比の勝地たり。…」と述べている。その木材の集散地となったのが御明神・上野新里の「春木場」である。

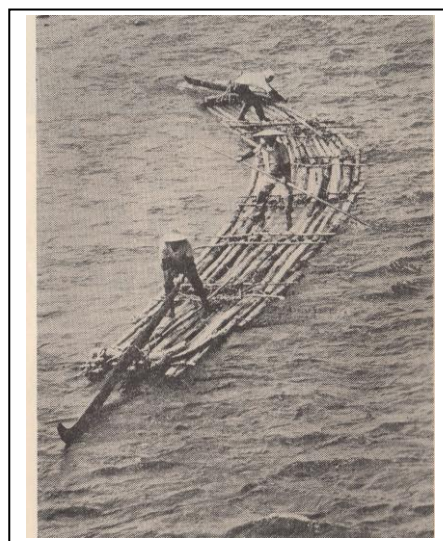
この春木場の川原の北側沿いを旧秋田街道（秋田往来・旧国道46号）が通っており、沿道両側には古くから人家が建ち並び集落を形成していた。江戸時代には「春木場の小宿（しょうしゅく）」（または小字名をとって「新里の小宿」とも）と呼ばれた。昭和初期まではここでの「春木取引」や「酒造業」などによる経済効果もあって「春木場」は雫石郷の中で最も商業の発達した地域であった。現在の「春木場集落」のあちこちにその面影が感じられる。

その春木場の“春木の集積場”の位置は、今でははっきりとは分からないが、土地の古老の話では現在の春木場橋の上流100mから200mほどのあたりだったという。

また、前出の資料本「雫石の旧家」の＜御明神地区＞に「中島・又兵衛（中屋敷家）」の記載があり、又兵衛家では「中屋敷川原」に春木を陸揚げさせ、借地料として一間当たり、春木2～3本を取り上げ、これで財を成した、と紹介されている。「春木」の集積所は左岸の（上野）春木場だけではなく、右岸の（御明神）中屋敷地内の川原にもあったということを示している。

※「春木」……春木と呼ばれる薪は、文化13(1816)年以来、公式には真木、一般には春木と呼ばれてきた。毎年二月、春木の伐木を希望するものは、藩の御山所に願い出て、許可を得なければならなかった。主に、樺（ぶな）などの雑木と呼ばれて用材に不適な樹種を五尺（およそ1.5m）の長さに切り落とし、春先の雪解け水を利用して流送した。皮が剥げるのが特徴だった。

※「筏（いかだ）」…雫石通の官山から正式な手続きを経て伐採された木材には、それを証明する方法として木口に墨汁を使用した鉄印を打ち付けた。これを「極印」と称した。極印を打ち付けた木材は、筏に組まれ雫石川を流送された。筏は尾入御番所前（現在の繋ぎ大橋の下付近）で止められ、御山奉行の手によって確認され、確認書ともいべき送切手（送り状）が発行された。この送り状によって初めて正当な払



◆筏流し風景（再現写真）
御所ダム完成前の昭和40年代半ばの写真（ライオン写真館）

下げ木材として認められた。

(附録) 田中喜多美氏らが語る「雫石川の筏師たち」のこと 〔もりおか物語 (壹) - 惣門かいわい - より抜粋〕

春木場を出発した筏は、盛岡市の明治橋上流の“杉土手”（現商工会議所付近）に運ばれた。雫石からの筏が到着した時の杉土手での筏師たちの様子や、実際に筏師だった田中喜多美さんのお兄さんのお話など、今ではもはや知ることのできない貴重なお話を上記の「もりおか物語」（盛岡の歴史を語る会企画・昭48年発行）から抜粋・要約して下記に紹介する。

語り手は、**海沼儀助氏**（明29年生・鉾屋町）、**阿部善吉**（明19年生・清水町）、**田中喜多美**（明33年生・山岸。雫石町出身）である。 <いずれも故人>

海沼 明治23(1890)年に鉄道が出来て、新山河岸（明治橋下流）に舟がほとんど来なくなつた。しかし杉土手に筏はたくさん着いた。雫石の方から三人ずつ筏に乗って川を下り、杉土手の木場に着く。すると若い者が筏の「ふじづる」をほどいて岸に上げて、“ヒト盛り”“フタ盛”といって木を盛り上げる。春木と言って冬の燃料にする三尺五寸(1m余り)ぐらいのもあれば、また材木にする長いものもあった。たくさん材木が運ばれてきたので、この木場には「外川」という大きな材木屋があつて繁盛していた。現在の明治橋付近の川岸（鈴木製材所）のあたりだ。

筏流しの人達は、ここで筏から上がると、あとは川原町あたりの茶屋ッコで酒飲んで、木半(きはん)という宿屋に泊まるか、あるいは日帰りで歩いて雫石へ帰って行った。川岸近くにはモッキリ屋も何軒かあつて繁盛したものだ。腰かけて呑む飲み屋を「煮売り屋」といつていた。季節季節のものを煮て食わせるということだったと思う。

阿部 いま明治橋が架かっている所には材木や杙（まさ・屋根葺きに使う。）なども扱う木半（高橋半次郎）という宿屋があつた。ここは雫石方面から流してくるユガダ（筏のこと）乗りがよく泊まったところであつた。

当時、明治橋、杉土手付近には、ノツツリと、川が狭くなるだけ筏が来たもんだ。

筏には「材木筏」と「春木筏」とがあつた。材木筏というのは、二間物の材木にハナグリという穴をあけて、隣から隣へと木を繋いだものだった。春木筏の方は、盛岡で燃料にする薪（たきぎ）を繋いだものだった。この薪は春の増水期に川を下して流したので“春木”といったもので、この春木を積み重ねておくところを“春木場”といった。

このように雫石川を流れ下つた筏は、杉土手の木場に着いて、木半の所で陸揚げされた。それでここに外川屋という大きな材木屋ができたわけです。

田中 私の兄は、明治から大正にかけて雫石から盛岡までの筏乗りをやつていた。一日かかって筏を組み、翌日は雫石川を下つて、盛岡サ下がるのである。天気の良いときは、雫石から三時間かからず、二時間半ぐらいで杉土手まで着いたものだという。

筏を操るのは、三人である。筏の先の方に乗るのは“鼻乗り”、真ん中には“中乗り”、筏の後の方に乗るのが“後乗り”である。鼻乗りは心得のある者、中乗りは新参者、後乗りは老練な者が務めた。先頭のがカジ(舵)を取り、後乗りがそれに上手に合わせて流していく。急流は勇ましく下り、淀みに来ればタバコをふかしたり、歌をうたったりして悠々と流していった。

筏を流すときの櫂(かい)を“うちがい”という。杉土手に筏を付けると、木材事務所へ届ける。そして、“うちがい”を担いで、秋田街道を雫石まで歩いて帰るのである。

盛岡でモッキリを一杯ひっかけて出掛ける。途中の仁佐瀬に茶屋ッコがあり、そこでも必ずモッキリをひっかけて、ワイワイ騒いで家に帰つたものだ。

筏乗りの手間賃は、兄の場合は一日五十銭だったかと思う。これは当時としては、良い手間賃だったと聞いている。米一升は十銭ぐらい。普通の日雇い賃金も十銭から十五銭ぐらい、田の草取りは米一升ぐらいだった。大工の賃金と筏流しの賃金とは、だいたい同じぐらいだったようである。だから筏師になることは、若い者にとっては自慢だったのではないか。なにしろ威勢の良い、目立つ職業だったから――。

特に雫石町内でも、安庭付近が盛んで、この辺はたいへん景気がよかった。半面には金回りがよいので、遊びを覚えてしまうものだから、カマド返し（破産）も多かった。

時々大きな“曲り家”が、太田や紫波だのサ売られていったこともあった。

筏を組むとき、木材と木材を繋ぎ合わせるには、昔は“ワクトウシ”といって、細長いマサカリ(ワクつぶしともいう)で木に穴をあけて繋ぎ合わせた。その後になって、鉄製の環(カン)ができた。木材は二間物は十三尺、一間物は七尺位、いずれも余分の長さを保つようにした。筏を杉土手の下流に付けるまでが筏師の仕事で、筏をほどいたり、川から揚げたりするのは、別の木場の人夫がやった。

春木というのは、旧暦二月、雪が“カタ雪”になって、道のないところでも自由に歩けるようになった頃、山に入って伐るのである。二尺八寸ぐらいに切って、棚積みにし、秋までそのままにしておく。秋の稲刈りが終わって、全山木の葉が落ちてしまったころ、それを山の沢にぶち込んで、谷川を流してきて、春木場に揚げるのである。このようにして御明神村の雫石川の春木場には、用材や棚薪が山のように積み上げられていた。

だから春木というのは二年越しの薪で、川を流してくるので全部樹皮がはがれている。よく乾燥していて、値段も高かった。こうして集められた春木を春木場で筏に組み、雫石川を下して盛岡に運んできて燃料としたのである。盛岡全部の燃料となるので、大変な量だった。

筏組みは、用材ものよりも春木の方が短いので、組むのが面倒なものだった。川流しの最中に急流の岩石などにぶつかると、バラバラッとほどける。それを鳶の口などを使って大急ぎで引き寄せてまとめる。とても忙しくて、危ない仕事である。ボヤボヤしていると、川の中にドンブリ落ちてしまう。急流のところは竿で操り、川幅が広くなり流れがゆるやかになると“うちがい”で漕ぐ。こういうことで「筏流し」も楽な仕事でなかった。

以上、「もりおか物語」終了。



明治以降もこの流送は続けられた。雫石でも多くの筏師たちがここで生計をたてていたと思われる。それが伺える賢治作品がある。

賢治作品「腐植土のぬかるみよりの照り返し」（文語詩稿「一百篇」より）

こはいかに赤きずぼんに毛皮など 春木流しの人はいちれつ
なめげに見高らかに言い木流しら 鳶をかつぎて過ぎ行きにけり

※この文語詩は、大正10年代に旧秋田街道沿いの橋場駅周辺の様子をつづったものと思われます。賢治さんもきっと「筏流し」に興味深く見ていたのでしょう。

筏流しが廃れたのは、大正11年に橋場線の開通をはじめ陸路も順次整備されたことによる。そして全く姿を消したのは、繋地区の雫石川に発電用の堰堤（えんてい）ができた昭和10年だった。

あとがき 今号は三人の会員からの寄稿があった。丸山会員の「町内の森林軌道」シリーズは今回が4回目で【完】としている。毎回「現地踏査＋証言」の内容に引き込まれてきた人も多いと思う。これだけの資料と現場跡が残されている森林軌道は県内では他にないのではないか。「産業遺跡」として“見学会”も考えられる。高橋繁会員の「少年少女歴史教室」への教育的論考はさすが。“歴史を学ぶ姿勢”を町内小学校児童に定着させたいものである。（S記）